

日本でも空前のブームが続く「ダ・ヴィンチ・コード」。

日本のキリスト者たちはこのブームをどのように受け止めているのだろうか。それが知りたくて、先ごろ京都の同志社大学で開かれた公開講演会

「『ダ・ヴィンチ・コード』を読み解く」に足を運んだ。

神学部・神学研究科の主催で、参加者約450人と記録的な盛況。キリスト教信者とは思えない年配の男性や熟年の夫婦の姿が目立つ会場で思

い浮かんだのは、高松塚古墳壁画の発見（1972年）を機に起こった空前の考古学ブーム。質疑も活発で、雰囲気はあのころ開かれた考古学関係の講演会やシンポジウムとそっくりなのだ。

田原由紀雄の



心のかたち

なことを考えたのだが、講師の一人、小原克博・同大学神

学部教授は「ダ・ヴィンチ・コード」に「隠し味」として

仕込まれた「グノーシス主義」的な世界観に注目し、キリス

ト教信者が少ない日本で爆発的な人気を呼んだ理由を鮮やかに分析してみた。

グノーシスとは「知識」「認識」を意味するギリシャ語で、初期キリスト教の正統主義の

立場から「異端」のレッテルを張られた宗教思想（運動）。

物質的な世界や肉体を拒否し、霊的・超越的な世界を求め

る傾向や、現実世界に対する徹底した違和感と超越的自

己の希求が特徴だ。小原氏によると、こうした世界観はSFアニメなど現代日本のサブカルチャーにも数多く見いだすことができる。

ブームの隠し味

の物語は、隠された真実を知ることによって違う世界が見えるという「グノーシス主義」的な世界観そのものだ。

人気アニメなどの根底にある世界観や救済のスタイルと

「ダ・ヴィンチ・コード」のそれが「共振」したがゆえに

日本でも大反響を呼んだというのが同氏の見解。気鋭の神

学者らしい卓見だと思った。

京都中央チャペルが主催し、キリスト教界のリベラル

派と保守派が「ダ・ヴィンチ

・コード」をめぐる論争する講演会も開かれた。だが、

熱しやすく冷めやすいのが日本人。やがてこのブームも去

るに違いない。では後に何が

残るだろうか。「聖母マリア」と「マグダラのマリア」を混

同するような、キリスト教への無理解と誤解の解消、とす

れば異宗教に対して正しい理解が要請される国際化時代の

一収穫となるのだが……。

（専門編集委員）

次回回は31日